福岡市埋蔵文化財調査報告書第765集

博多（はかた） 94

―― 博多遺跡群第136次調査報告書 ――

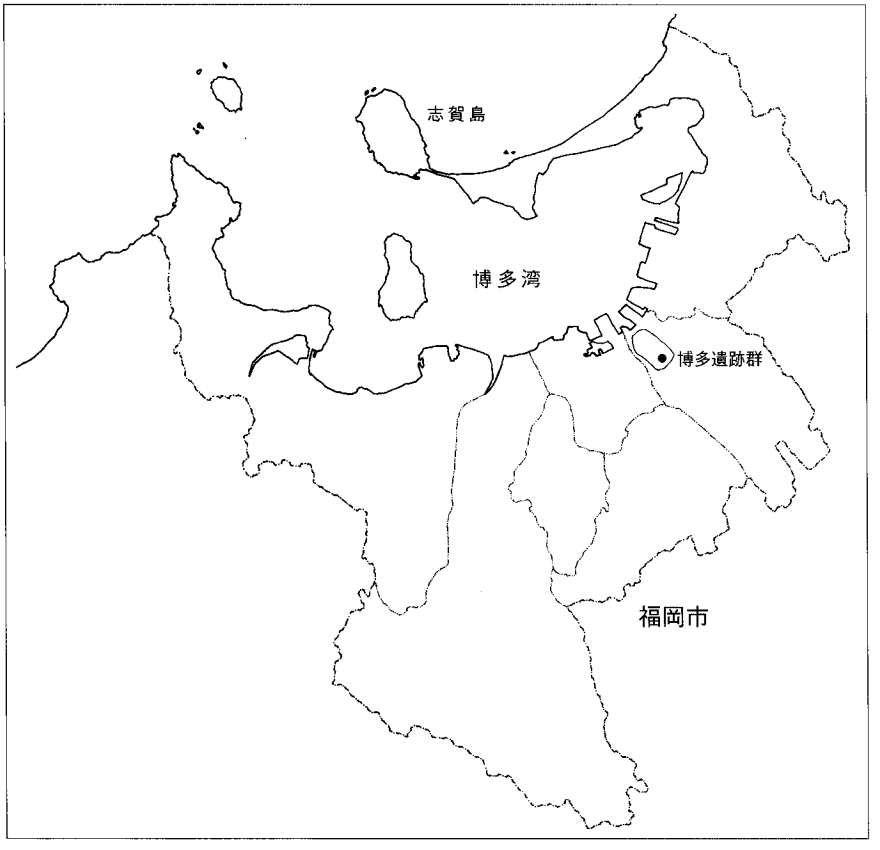
2003

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第765集

博多（はかた） 94

―― 博多遺跡群第136次調査報告書 ――



調査略号　HKT136
調査番号　0149

2003

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が多く残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の都市部周辺における開発事業の増加に伴い、止むを得ず失われていく埋蔵文化財の発掘調査を実施し、失われていく遺跡の記録保存に努めているところであります。

本書は、博多遺跡群第136次調査の成果を報告するものであります。本調査では弥生時代から中世にかけての集落遺跡の一部を調査し、博多遺跡群の全容を知る上での多くの貴重な成果をあげることができました。本書が、市民の皆様の文化財に対する理解を深めていく上で活用されると共に、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、費用負担をはじめとする御協力を賜りました日本リラクセーションスキルの皆様をはじめ、多くの方々のご協力とご理解に対し、心からの謝意を表します。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　生田征生

…… 例　　言 ……

1．本書は、博多区博多駅前2丁目における専門学校建設工事に先立って、福岡市区教育委員会が平成13年度（2002年度）に実施した博多遺跡群第136次調査の発掘調査報告書である。

2．本書の執筆・編集には本田浩二郎があたった。

3．本書に使用した遺構実測図・遺物実測図は本田が作成し、製図した。

4．本書の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北である。
なお遺物実測図の縮尺は土器類・土製品を1/3・1/4に統一した。

5．検出した遺構については、調査時に検出順に通し番号を付した。

6．本書で使用した写真は本田が撮影した。

7．本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定であるので、活用されたい。

本　文　目　次

博多遺跡の立地と環境…… 1

1．はじめに…… 3
(一) 調査にいたる経緯…… 3
(二)調査体制 …… 3

2．発掘調査の記録…… 4
(一) 調査の概要…… 4
(二) 基本層序…… 6
(三) Ⅰ区の調査…… 8
(四) Ⅱ区の調査……11
(五) その他の出土遺物……19

3．まとめ……24

裏表紙　　Ⅱ区出土遺物

第一章　博多遺跡の立地と環境

博多遺跡は、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらに現代まで続く複合遺跡である。地理的には、玄界灘に面する博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西を博多川(那珂川)、東には江戸時代に開鑿された石堂川(御笠川)、南は石堂川開鑿以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川(御笠川)によって画されている。

この御笠川と那珂川によって挟まれた地域は、弥生時代以後の主要な遺跡が集まる地域でもある。上流側より著名な遺跡名を列挙していくと、奴国の中心地である須玖岡本遺跡を中心とした一帯の遺跡群、朝鮮系無文土器が大量に出土した諸岡遺跡、日本最古の水田・環濠集落として知られている板付遺跡、弥生時代の青銅器鋳造地のひとつである那珂遺跡群、弥生時代後期の環溝群と「那津官家」と推定される倉庫群の調査が行われた比恵遺跡群などがある。これらの遺跡群は、ほぼ直線上に並んで立地する。博多遺跡群で検出・報告されている弥生時代中期・後期の集落・甕棺墓群は、これらの遺跡群の延長上で理解されよう。さらに、この延長でそのまま博多湾を渡ると、志賀島の「漢委奴国王」の金印出土推定地にあたる。弥生時代中期に、周辺に可耕地を持たない砂丘上に忽然と出現する博多遺跡群は、奴国の海上活動を支える拠点集落の一つとして理解することができる。

律令時代にはいると、御笠川の最上流地域に大宰府が設置され、九州の政治・軍事的中心地となる。また、博多湾岸には、博多遺跡群と入り海ひとつ隔てた西の丘陵上に、対外交渉の拠点として鴻臚館が置かれた。博多遺跡群内に官衙が設置されたという文献記録はないが、石帯・銅製帯金具・墨書須恵器・須恵器硯・皇朝銭・鴻臚館式瓦・老司式瓦などの特殊な遺物が出土しており、律令官人・それに伴う施設の存在が推定される。平安時代後期になり律令体制が弛緩すると、対外貿易の管理も中央政府の直接的な管理・掌握から、大宰府を通じての管理に変質し、大宰府官人による蓄財のための私貿易の拡大をもたらす。このような時勢の流れの中で、11世紀に入り博多において宋商人の居留が本格的に始まる。博多遺跡群が本格的に繁栄・展開するのは11世紀後半に入ってからであるが、該期の膨大な量の輸入貿易陶磁器がこれまでに出土している。さらに、12世紀末から13世紀前半にかけて、聖福寺・承天寺が博多在住の宋商人綱首の援助のもとに、相次いで建立され、周辺の都市化が急速に進行し、筥崎宮周辺に展開する箱崎遺跡群と共に中世都市群として発展していくことが現在までの調査成果から分かっている。

鎌倉時代には、二度にわたる元寇で博多付近一帯は戦場となり一旦は荒廃するが、13世紀末には鎮西探題が博多に設置され、博多は貿易の中心地だけでなく、九州の政治的中心地という役割を持つようになる。調査成果から13世紀末から14世紀初めにかけて、道路遺構が各調査地点で確認されており、それらは戦国期まで存続することが分かっている。これらの道路は必ずしも統一された規則性を持つわけではないが、中世後半を通じての博多の都市景観はここに確立されたといえよう。

室町時代後半の博多は堺と並んで自治都市として有名であったが、度重なる兵火によって焼亡している。1586年には中国の毛利氏の軍と対峙した薩摩の島津氏によって焼かれ灰燼と帰する。しかし、翌年には豊臣秀吉によって復興される。これが太閤町割であり、この時点で鎌倉時代以降続いていた博多の街区・道路は廃止され、博多全体は長方形街区と短冊形地割で仕切られた。こうして、中世都市博多は近世都市博多として再生された。しかし、江戸時代に入り、鎖国政策がとられ、貿易都市としての博多は幕を下ろし、商人町博多として明治維新を迎えたのである。

昭和57年より始まった博多遺跡群の発掘調査は、平成15年3月現在、第141次調査を数える。中世都市「博多」の様相が遺跡の破壊と同時に着実に明らかにされつつある。

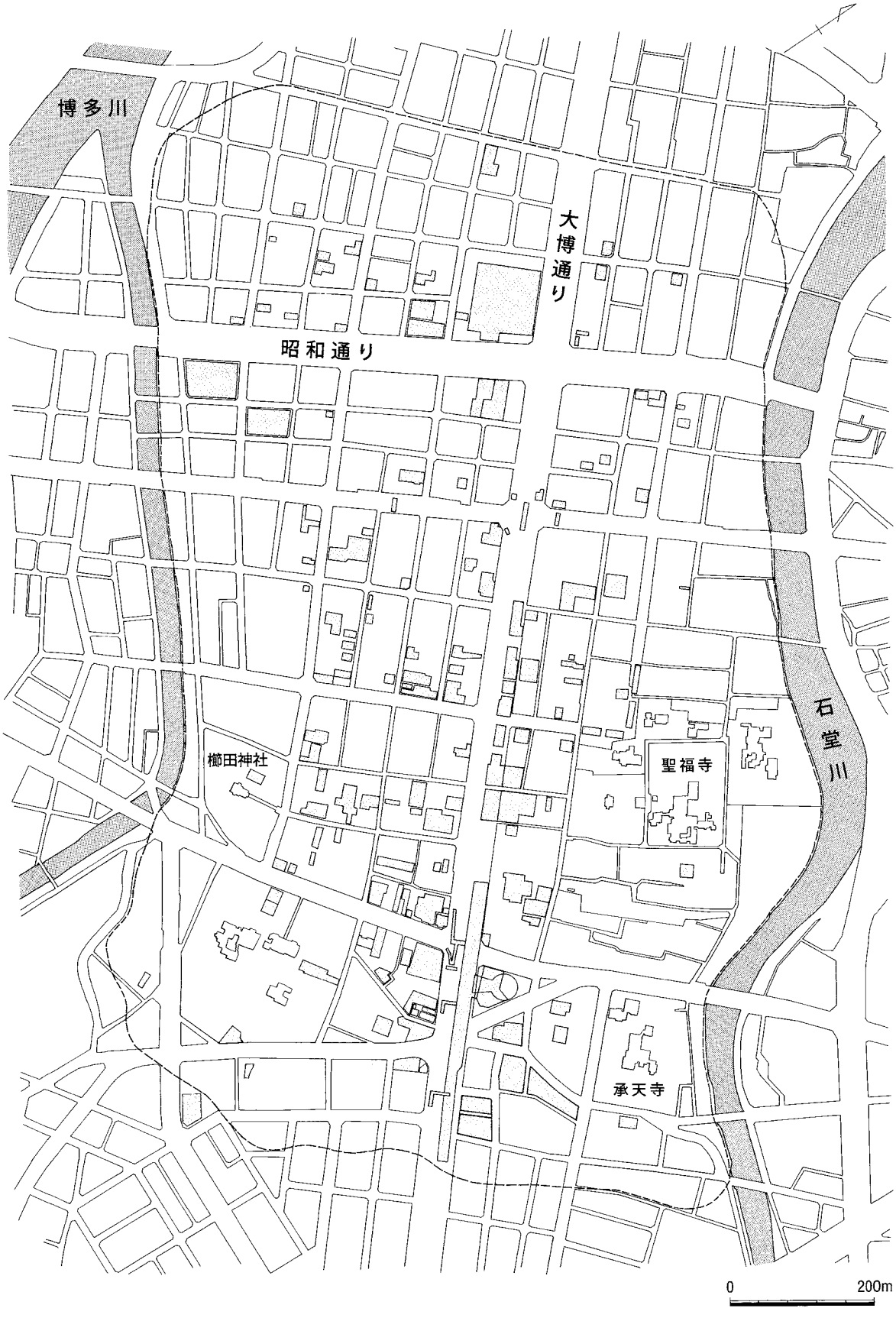


Fig.1　博多遺跡群内調査区位置図(S=1/8000)

1. はじめに

（一）調査にいたる経緯

平成13年10月25日、株式会社日本リラクセーションスキルより福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、博多区博多駅前2丁目184番におけるビル建設予定地内に関しての埋蔵文化財事前審査願が提出された。

申請地は周知の遺跡である博多遺跡の南東側に位置しており、前所有者から平成11年9月に埋蔵文化財事前審査願が出され、平成11年10月26日に試掘調査が既に行われていた地点であった。試掘調査では、現地表面から150～180cm程掘り下げた褐色粗砂層上面において古代から中世にかけての溝、土坑、柱穴等の遺構が検出され、該期の遺物の存在を確認した。

その後、土地の売買が行われ、申請地に専門学校建設の計画が持ち上がり、先の試掘調査の結果を基に申請者と文化財保護に関する協議を行った。これらの遺構は濃密に遺存しており、建設工事に伴う基礎工事によって遺跡の破壊は免れないため、工事によって止むを得ず破壊される部分については全面に発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、平成14年1月17日に着手し、平成14年2月15日に終了した。

（二）調査体制

調査委託	日本リラクセーションスキル		代表取締役	美野田　啓二
調査主体	福岡市教育委員会	教育長		西　憲一郎
				生田　征生（現任）
調査総括	同	埋蔵文化財課	課長	山崎　純男
	同	埋蔵文化財課	第2係	力武　卓治
				田中　寿男（現任）
調査庶務	同	文化財整備課		御手洗　清（現任）
調査担当	同	埋蔵文化財課	事前審査係	杉山　富雄（試掘調査）
				大塚　紀宣（前任）
				田上　勇一郎
			第2係	本田　浩二郎（本調査）

調査作業	阿部　幸子	池　聖子	大音　輝子	小池　温子
	小路丸嘉人	小路丸良江	永田　優子	永田　律子
	夏秋　弘子	寺園恵美子	増田ゆかり	吉川　暢子
	徳留　大輔（九州大学）			

整理作業　有島美江　鳥飼悦子　室　以佐子　鳥尾安子

遺跡調査番号	0149	遺跡略号	HKT136
調査地地番	福岡市博多区博多駅南2丁目184	分布地図番号	千代・博多48
開発面積	118.10㎡	調査面積	52.0㎡
調査期間	2002.1.17～2002.2.15		

2. 発掘調査の記録

（一）調査の概要

博多遺跡群は、福岡平野の博多湾岸に位置し、那珂川と御笠川(石堂川)の河口に挟まれた三角州平野上に形成される遺跡群である。博多遺跡群の立地する砂丘地形は、南から大きく「博多浜」と「息浜」(おきのはま)の二つに分けられる。現在の「博多」は、この砂丘地形の上に人工的に2m程整地層などが盛り土され形成されたものであるが、現状でも埋没した旧地形の起伏を、比較的よく反映していることが、これまでの調査成果より判明している。

今回報告を行う、博多遺跡群第136次調査地点は遺跡範囲の南東側に位置しており、調査区の現状は宅地であった。調査は調査対象面積が狭いため、南側と北側の2地点に分けて行った。調査の工程上、北側の調査区をⅠ区とし、南側の調査区をⅡ区と設定し、Ⅰ区の調査から着手した。

試掘調査では現地表面から160㎝ほど掘り下げた暗褐色砂層面上で遺構が検出されており、これに基づいて重機による表土掘削を開始した。調査地点の現地表面の標高は5.20m前後を測る。

調査対象面積が狭く、調査区周囲には土留め用の杭を打設することが不可能であったため、調査区法面には傾斜を付けて表土掘削を行った。これにより調査が進むに連れ、調査面積が減少し、最終的な調査面積はⅠ区で5㎡前後、Ⅱ区で10.5㎡前後のものとなった。調査に伴い表土掘削を行った面積は52㎡を測る。

表土掘削を行っている段階で、調査区内には既存建物の地中梁が残存していることが確認された。地中梁はⅠ区とⅡ区の間や調査区北西側に残存しており、これにより両調査区の土層は分断され整合

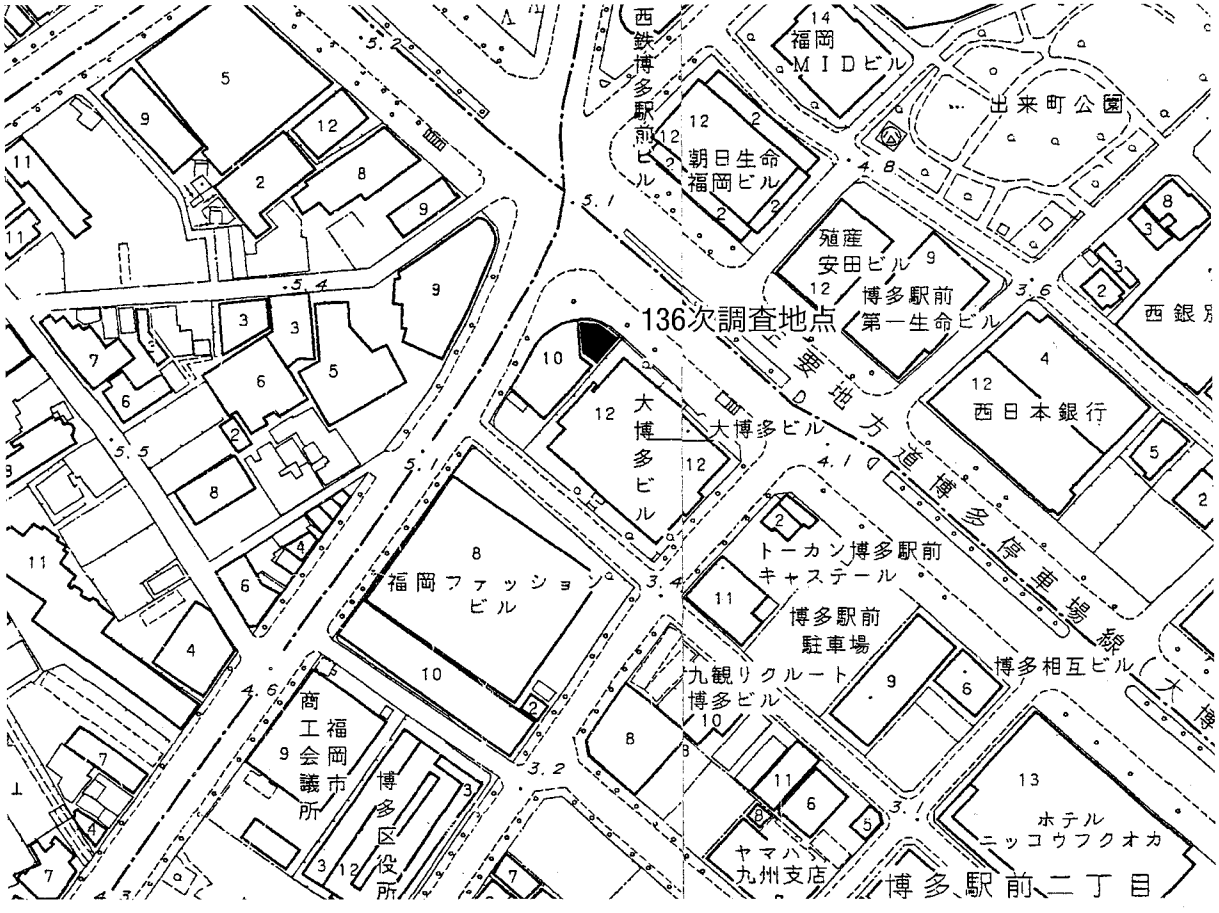


Fig.2　調査区位置図(S=1/2500)

性の観察が困難なものとなった。両調査区の遺構面の整合関係の評価は、標高・土質などの観察により図上で行うこととした。調査区北西側は地中梁が隣接している建物下部へ延びており、表土掘削に伴い隣接建物への被害が考えられたため、調査は断念した。地中梁は標高4.60m前後の高さから標高3.00m前後の高さまで残存している。

調査はⅠ区で3面の遺構面を設定し、Ⅱ区では5面の遺構面を設定した。Ⅰ区は南側壁と西側壁に調査第一面まで攪乱層が切り込み、北東側は地中梁で攪乱される。四方を攪乱層で囲まれているため、検出された遺構は完掘できなかったものが多い。Ⅱ区では北東側壁の一辺を除いて三方の壁面が地中梁と既存建物の基礎工事により攪乱されていた。西側壁では地中梁以下に遺構が確認されるが、地中梁は劣化しており崩壊の危険性が考えられたため、調査区の拡張は行っていない。

調査では、弥生時代後期に埋没したと考えられる谷地形、古代の区画溝、不定形土坑、調査区内では建物としてはまとめられない柱穴群などの遺構を検出した。Ⅰ区は5㎡程度と狭く、遺構の形状を把握するのも困難な調査区であった。不定形土坑などの遺構を検出したが、遺構の大半が調査区外へと延びるため、遺構の規模・形状・性格を正確に捉えることができたものはほとんどない。Ⅱ区では中世末から近世にかけての井戸遺構、古代の溝、弥生時代に埋没した谷地形などの遺構を検出した。

遺物は検出された遺構から出土したものは少なく、大半が遺構面から次の遺構面へと掘り下げる段階で出土したものである。遺物はコンテナケース5箱分が出土している。

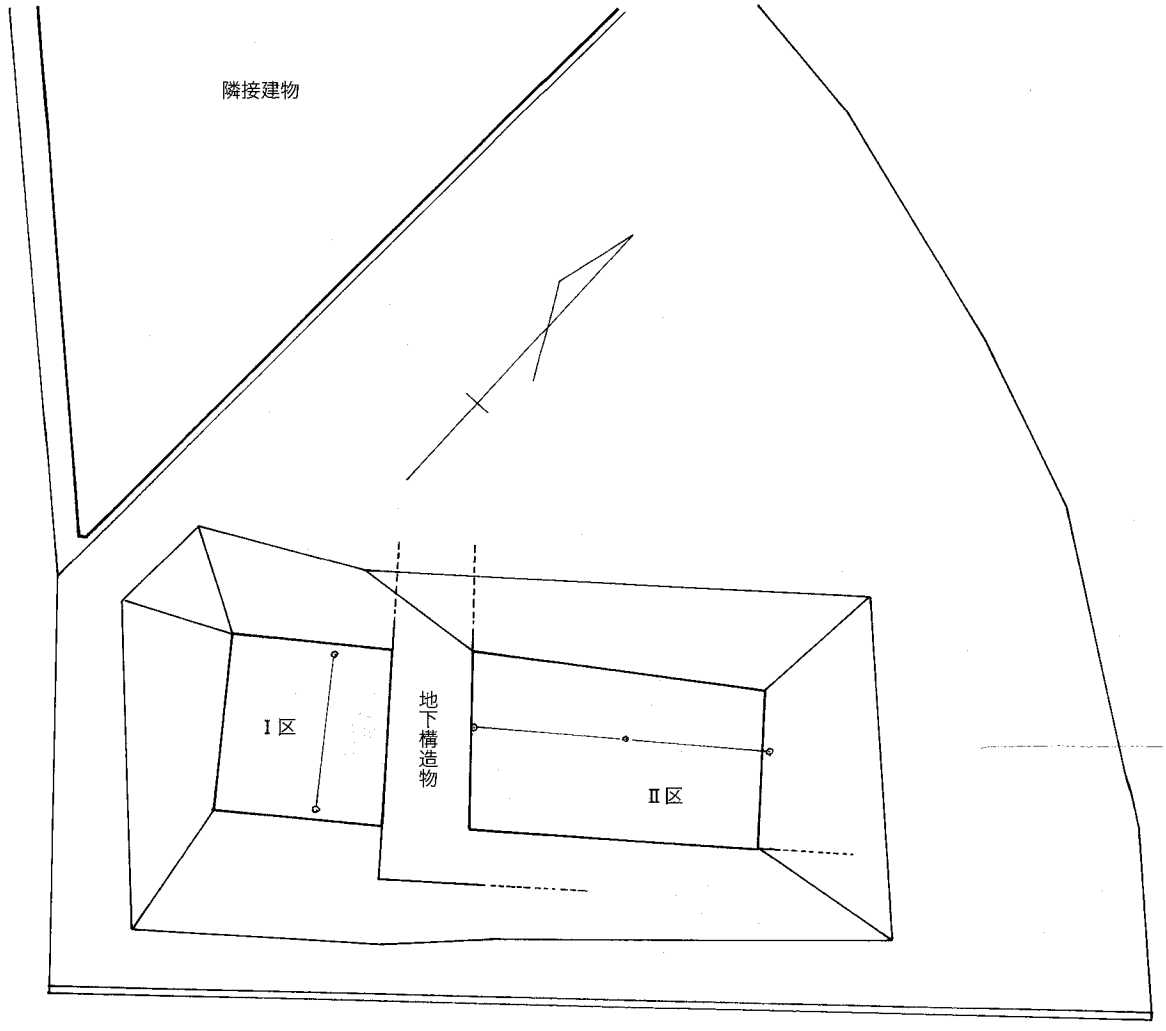


Fig.3　調査区配置図(S=1/100)

（二）基本層序（Fig.4）

第136次調査地点は博多遺跡群が立地する砂丘の南側列に位置している。この砂丘は縄文時代中期以降に形成されたものであり、博多遺跡群の基盤層となる黄褐色砂層面が上層部分に堆積する。調査区付近では標高2.7～2.8m前後の高さで基盤層である黄褐色砂層が検出される。

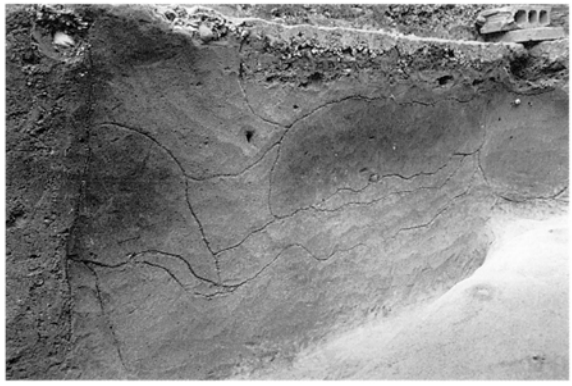
本調査地点は既存建物による攪乱を著しく受けており、標高3.00m前後付近まで建築廃材が投棄され、コンクリート製の地中梁が標高4.00m前後の高さで残存していた。地中梁以上では遺構の検出はなく、既存建物建設時に全て破壊されたものと考えられる。

Ⅰ区の調査では3面の遺構面を設定した。第1面は標高3.0m前後で堆積する暗黄褐色砂層面上、第2面は標高2.8～2.9m前後の暗褐色砂層面上、第3面は標高2.7m前後の褐色砂層から黄褐色砂層面上で設定した。第1面上には土層観察より標高3.40m前後の高さで堆積する暗褐色砂質土層面が観察され、これに伴う遺構の存在が認められたが、調査区内では攪乱により大部分が消滅しており、遺構面の設定は行えなかった。Ⅱ区では5面の遺構面を設定した。第1・2面はⅠ区では消滅のため設定できなかった暗黄褐色砂質土層面上、暗褐色砂質土層面上にて設定した。第3面はⅠ区第1面に相当する暗黄褐色砂層面上、第4面はⅠ区第2面に相当する暗褐色砂層面上、第5面はⅠ区第3面の黄褐色砂層面上にて設定した。これらの堆積層は弥生時代終末期、古代から中世前半にかけての遺物を含む包含層になっており、東側に向かってやや傾斜した状態で堆積する。各遺構面掘り下げ時には、遺構に伴わないこれらの遺物が出土する。

Fig.4上段にはⅠ区とした調査区の南側から東側壁の土層断面図、下段にはⅡ区の南側から東側の土層断面図を示した。Ⅱ区東側には埋没した谷地形が存在していたため、土層断面には各遺構面を図示することができなかった。各調査区の遺構面は次の表に示すように対応する。

Ph.1　Ⅰ区南西壁土層（北東から）

Ph.2　Ⅱ区土層堆積状況（東から）



Ph.3　Ⅱ区東壁土層堆積状況（北から）

Ph.4　Ⅱ区南西壁土層（北東から）

Ⅰ区	Ⅱ区	遺構検出面
(攪乱により消滅)	第１面　標高 3.6 m	暗黄褐色砂質土層
(標高 3.4 mで部分的に検出)	第２面　標高 3.4 m	暗褐色砂質土層
第１面　標高 3.0 m	第３面　標高 3.0 m	暗黄褐色砂層
第２面　標高 2.8 ～ 2.9 m	第４面　標高 2.8 ～ 2.9 m	暗褐色砂層
第３面　標高 2.7 m	第５面　標高 2.7 m	黄褐色砂層

表1.　博多遺跡第136次調査各遺構面対応表

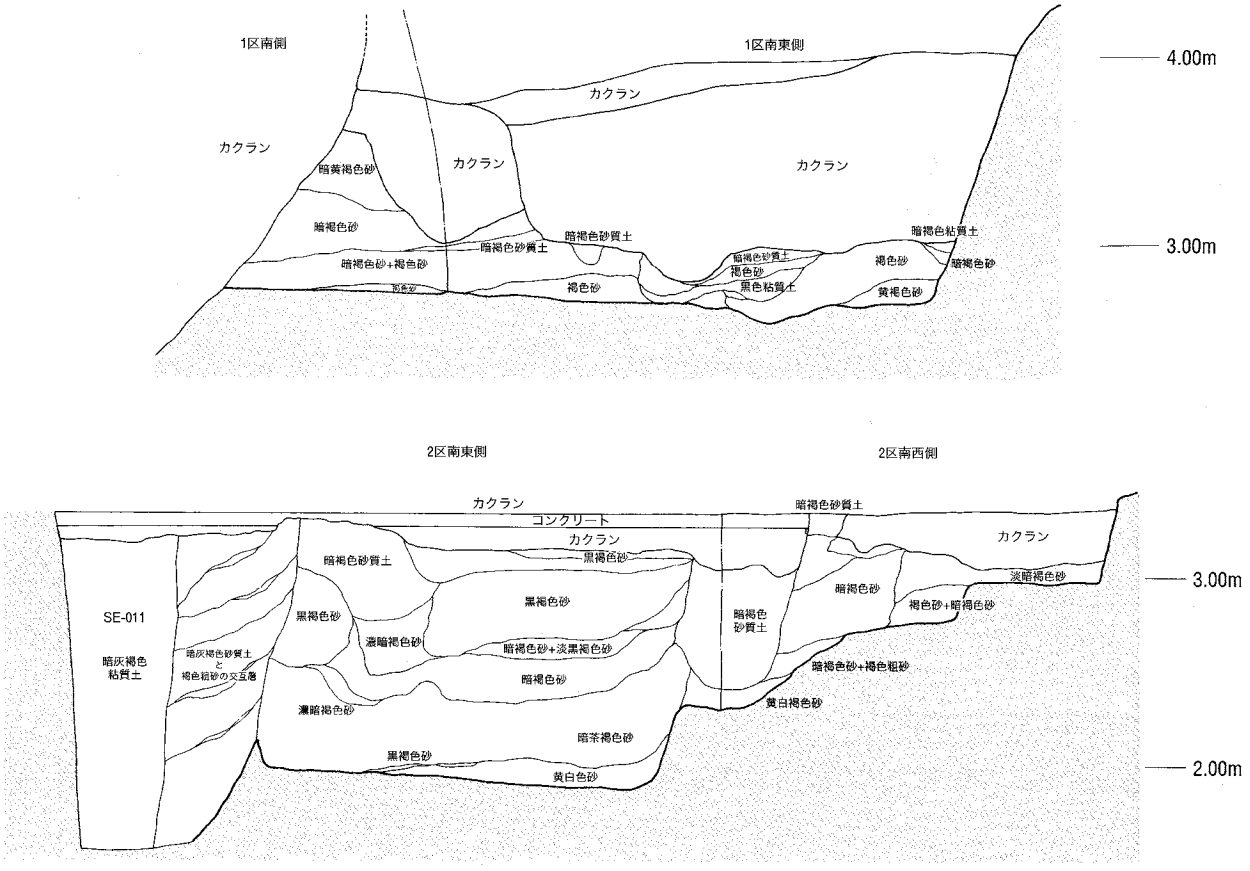


Fig.4　調査区内土層断面実測図(S=1/40)

（三）Ⅰ区の調査

調査対象地南側で設定した調査区である。調査対象地は北側に開く扇形の地形を呈しており、南側に狭くなる。調査により生じる排土は調査区内で反転処理することになっていたため、南側より着手し調査面積の確保を目指したが、現地表面より80㎝前後の深さに既存建物の地中梁が残存しており、18㎡の面積について表土掘削をおこなった。Ⅰ区の北東側に地中梁が位置しているが、それ以外の三方の壁面には攪乱層となっており、壁面から建築廃材などが露出する状態であった。このような状況であったため、調査は5㎡程度の狭い範囲を対象に行わざるを得なかった。以下に各遺構面と検出された遺構についての説明を行う。

a. 第1面の調査（Fig.5）

標高3.0m付近で検出される暗黄褐色砂層面上で設定した遺構面である。これより上部では攪乱によって遺構検出できる面がほとんど残存していなかったため、調査は行っていない。検出された遺構には003号遺構・006号遺構などの不定形土坑がある。これらの土坑は調査区外へと延び、完掘できていない。土坑内には炭化物を多く含む暗灰褐色粘質土などが堆積する。遺物は土師器坏などの小片が出土する。中世前半期の遺構と考えられた。

b. 第2面の調査（Fig.6）

標高2.8～2.9m前後の暗褐色砂層面上で設定した遺構面である。第1面で検出されなかった遺構等や007号遺構・009号遺構などの遺構が検出された。007号遺構の埋土は炭化物を含んだ暗褐色砂質土で、須恵器甕の胴部片などの遺物が出土する。古代末前後の時期が考えられる遺構面である。

Ph.5　Ⅰ区全景（北東から）

Ph.6　Ⅰ区全景（北から）

Ph.7　Ⅰ区全景（北東から）

Ph.8　Ⅰ区全景（北東から）

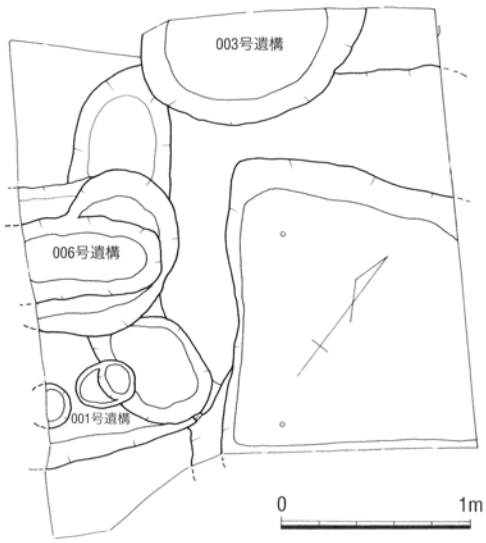
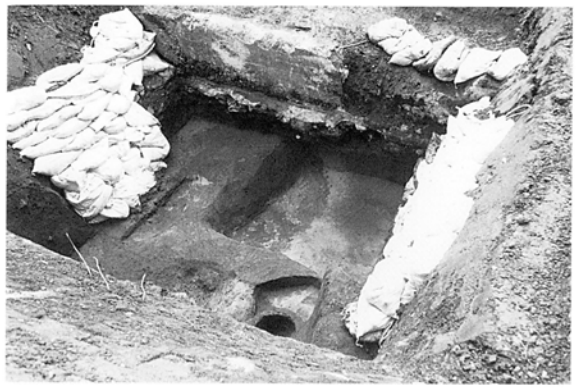


Fig.5　Ⅰ区第1面遺構実測図(S=1/40)

Ph.9　Ⅰ区第1面完掘状況(東から)



Ph.10　Ⅰ区第1面完掘状況(南から)

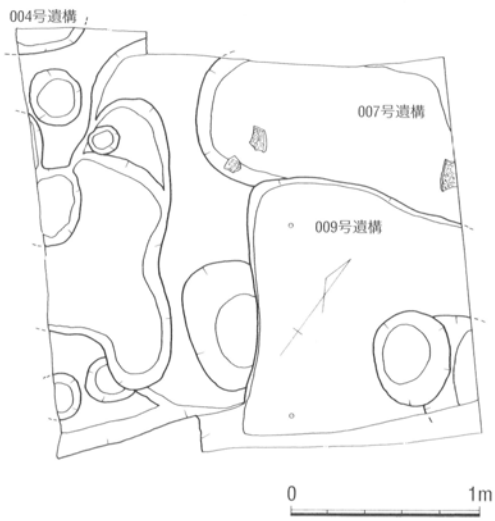


Fig.6　Ⅰ区第2面遺構実測図(S=1/40)

Ph.11　Ⅰ区第2面完掘状況(西から)

Ph.12　Ⅰ区第2面完掘状況(南東から)

c. 第3面の調査（Fig.7）

標高2.7m前後で検出される黄褐色砂層面上で設定した遺構面である。検出された遺構は第2面で検出されていた009号遺構の下部、010号遺構などである。010号遺構の埋土は暗褐色砂であり、土師器坏の小片が出土するが、時期を比定できる遺物の出土はなかった。

Ⅰ区北東側を画する地中梁は標高3.2m前後まで付設されるが、それ以下では遺構埋土などが観察できる。地中梁下には009号遺構が延びており、断面に堆積状況が観察できた。地中梁は拳大の礫層を敷き詰めた上にコンクリートを流し込んだもので、下部の礫層以下を掘り込むのは崩壊の危険を伴うため、土層観察のみに留めた。

Ⅰ区では001～010号遺構までの遺構を検出したが、出土した遺物は数点を数えるに過ぎない。

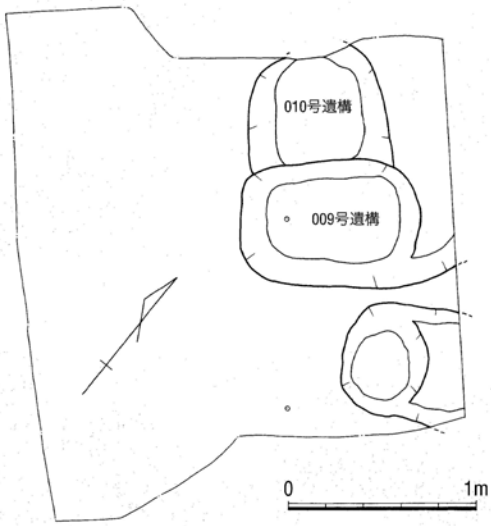


Fig.7　Ⅰ区第3面遺構実測図（S=1/40）

Ph.13　Ⅰ区第3面完掘状況（西から）

Ph.14　Ⅰ区第3面完掘状況（南から）

Ph.15　Ⅰ区北西壁土層堆積状況（南西から）

Ph.16　Ⅰ区第3面完掘状況（西から）

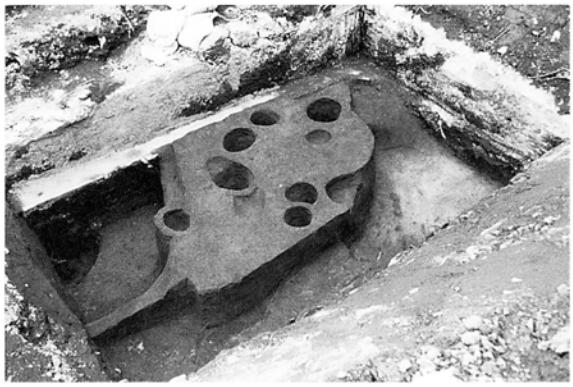
（四）Ⅱ区の調査

Ⅱ区は調査対象地北側に設定した調査区である。33㎡の面積について表土掘削を行ったが、Ⅰ区と同様に現地表面より80㎝前後の深さで地中梁が箱形に残存しており、調査が行えたのは地中梁の内部10.5㎡の面積についてである。Ⅱ区北西側には既存建物の杭が並んで検出され、それより西側の部分については建築廃材などが投棄されていたため、調査は行わなかった。

a. 第１面の調査（Fig.8）

Ⅱ区第１面は標高3.6m前後で検出された暗黄褐色砂質土層面上で設定した。この遺構面はⅠ区では攪乱のため消滅しており、調査は行っていない。Ⅱ区第１面で検出された遺構は、011号遺構とした井戸遺構や013・014号遺構としたピット群である。ピットは直径20～40㎝前後を測り、検出面から底面までの深さは10～50㎝前後を測る。これらのピットから出土した遺物には土師器坏・国産陶器・貿易陶磁器などがあるが、いずれも小片である。

出土遺物より第１面とした遺構面の時期は中世前半期が考えられる。



Ph.17　Ⅱ区第1面完掘状況（北から）

Ph.18　Ⅱ区第1面完掘状況（西から）

Ph.19　Ⅱ区第1面完掘状況（北東から）

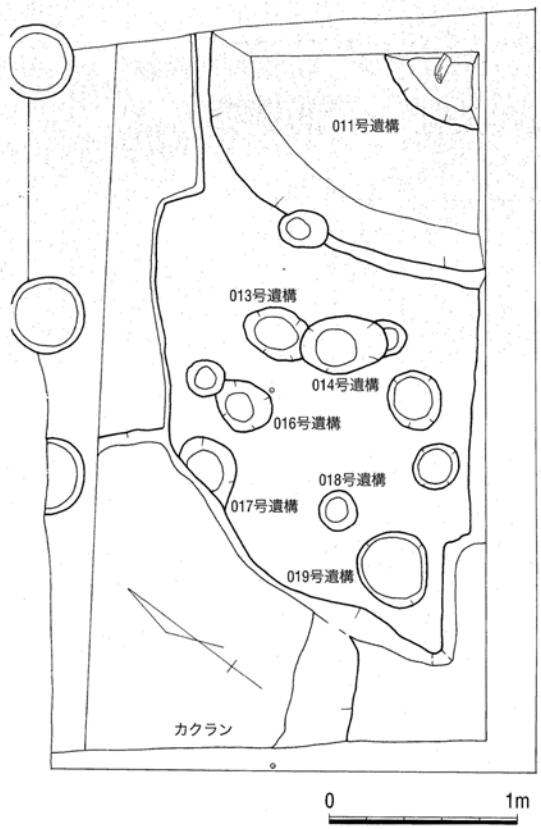


Fig.8　Ⅱ区第1面遺構実測図（S=1/40）

SE-11（Ph.20 ～ Ph.23）

Ⅱ区東端部で検出した井戸遺構である。瓦を井筒に使用した井戸で、井戸自体の時期は17世紀後半代のものである。調査区には井戸の西側半分がかかるのみであったため、完掘はしていない。検出された部分から直径3.0m前後の掘方が復元される。井側に使用される瓦は11枚で全周するもので、厚さ3cm前後を測る。井筒内には暗灰褐色粘質土が堆積しており、礫・瓦片などが出土した。井戸は調査区南東側壁面において標高3.20m前後の高さから掘り込まれているのが観察できる。これ以上では既存建物基礎工事のため土層が攪乱を受けており、本来の掘り込み面は検出されなかった。調査で掘り下げを行ったのは標高1.50m前後の高さまでである。これ以上は壁面倒壊の危険性が考えられたため断念した。井戸の掘方には暗灰褐色砂質土と褐色粗砂層が交互に堆積しており、埋土下層から古代から中世にかけての遺物が出土した。井戸掘削時に中世以前の遺構などを掘り抜いており、埋土中に遺物が混入したものと考えられる。SE-11とした井戸遺構の時期を示すものではないが、本来の遺構から遊離した遺物として取り上げを行った。

Fig.9に井戸埋土中からの出土遺物を示した。

1～3は土師器皿である。1は復元口径9.4cm、底径7.2cm、器高1.0cmを測る。底部は糸切り調整される。2は復元口径10.0cm、底径6.2cm、器高1.3cmを測る。底部はヘラ切り調整され、体部はナデ調整が施される。焼成は良好で色調は褐色を呈する。3は復元口径11.2cm、底径7.8cm、器高1.7cmを測る。底部はヘラ切り調整される。色調は褐色を呈する。4は土師器坏である。復元口径13.4cm、底径9.8cm、器高2.5cmを測る。底部は糸切り調整される。6～9は瓦器椀である。6は復元口径16.0cm、残存高2.9cmを測る。内外器面には横方向にヘラ磨きが施されており、外器面の一部は銀化する。焼成は良好で、全体的な色調は黒灰色を呈する。7は復元口径14.4cm、残存高3.1cmを測る。外器面のヘラ

Ph.20　SE-011調査状況（南から）

Ph.21　SE-011土層堆積状況（南西から）

Ph.22　SE-011土層堆積状況（南西から）

Ph.23　SE-011調査状況（西から）

磨きは摩滅のためほぼ失われているが、内器面には良好に残る。8は復元口径14.0cm、残存高3.9cmを測る。外器面はナデ調整が施されており、体部は下半部には指頭圧痕が観察される。9は復元口径16.0cm、残存高2.6cmを測る。外器面には横方向のヘラ磨きが施され、内器面には格子状のヘラ磨きが施される。10は土師器椀の高台部片である。高台径8.0cm、残存高2.4cmを測る。高台は断面が三角形を呈し、外底部近くに貼り付けられる。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

11・12は須恵器蓋である。11は宝珠形の摘みを持つ蓋で、残存高1.6cmを測る。天井部にはヘラ削りが施される。色調は濃灰色を呈する。12は復元口径15.6cm、残存高1.3cmを測る。

4・13・14は須恵器碗である。4は復元口径14.0cmを測る。13は復元口径16.0cmを測る。14は高台径9.0cmを測る。15・16は玉縁状口縁を持つ白磁碗である。15は復元口径15.4cm、16は復元口径14.8cmを測る。17は同安窯系青磁皿である。内面見込みには櫛描文が施される。

18は古代の土師器甕口縁部片である。復元口径24.6cmを測り、内器面にはヘラ削りが施される。

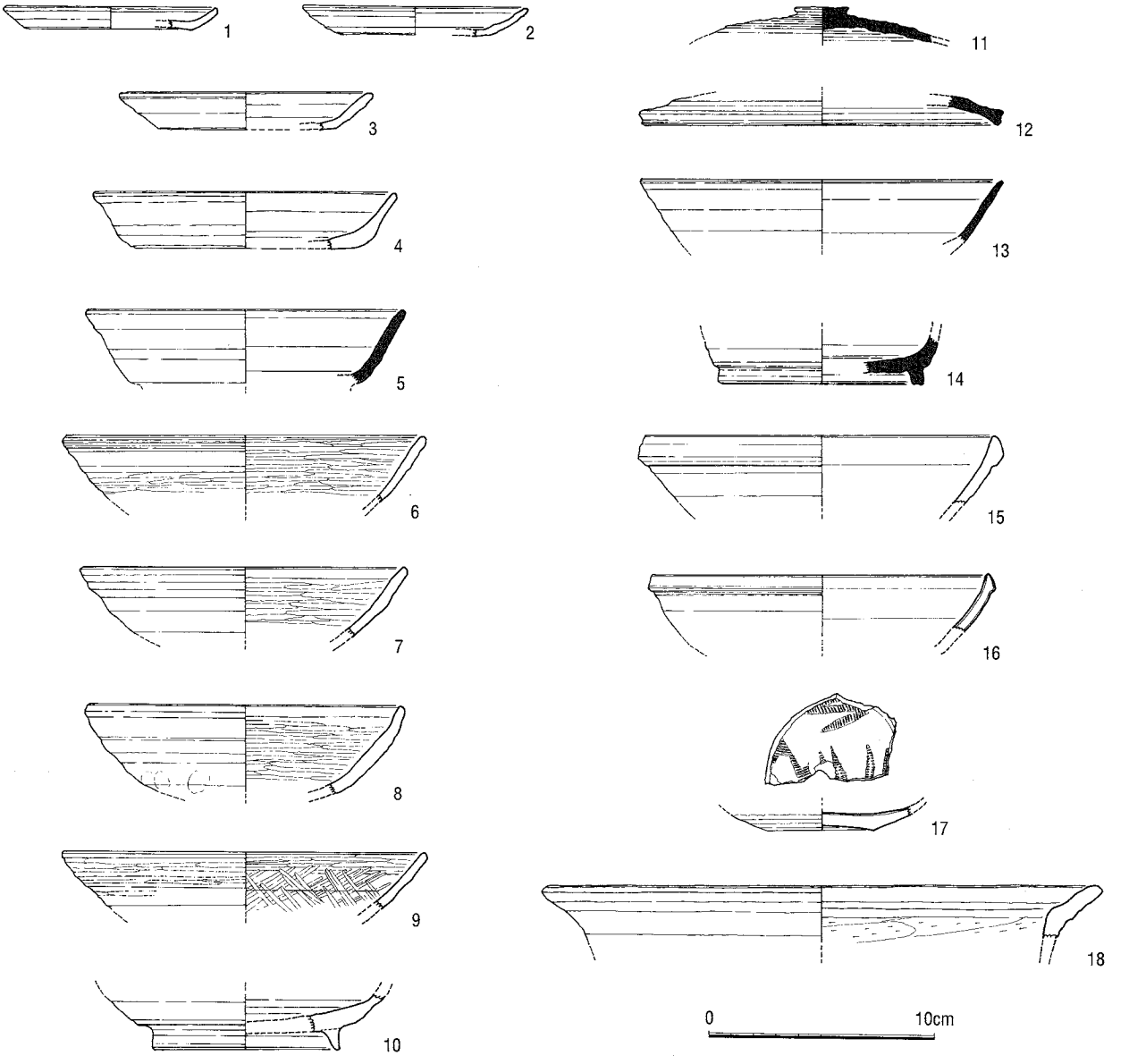


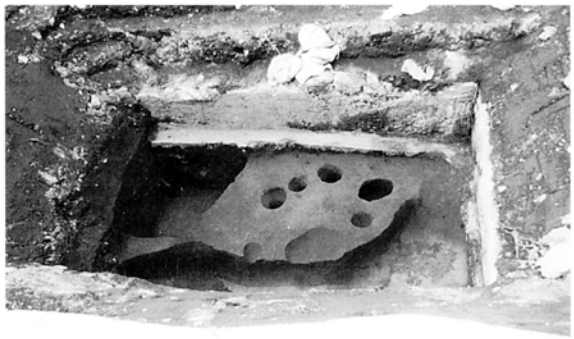
Fig.9　SE-011出土遺物実測図(S=1/3)

b. 第２面の調査（Fig.10）

標高3.4m前後で検出される暗褐色砂質土層面上で設定した遺構面である。Ⅱ区第1面と同様にⅠ区では設定できなかった遺構検出面である。調査区西側は地中梁付設工事によって破壊されており、攪乱層が堆積する。攪乱層を除去した黄褐色砂層面（第5面遺構面）の観察では、砂層が北側に向かってわずかに傾斜していることが分かる。

第2面で検出された遺構は、020号・022号遺構としたピットや第1面で検出されていた011号遺構・014号遺構などがある。第2面で新たに検出されたピットには暗褐色砂が埋土として堆積しており、ピット内からは土師器坏や須恵器碗、貿易陶磁器などの小片が出土する。調査範囲が狭いため、建物として復元できるものはない。調査区北側半分には黒褐色砂層が堆積しており、遺構埋土と考えられたが第2面での調査は行わず、第3面での調査を行うこととした。

第1面から第2面への掘り下げを行った際に、暗黄褐色砂質土層から遺物が出土した。土師器甑・土師器甕・須恵器碗・蓋・高麗陶器・瓦器椀などの遺物がある。



Ph.24　Ⅱ区第2面完掘状況（北西から）

Ph.25　Ⅱ区第2面完掘状況（北東から）

Ph.26　Ⅱ区第2面完掘状況（南西から）

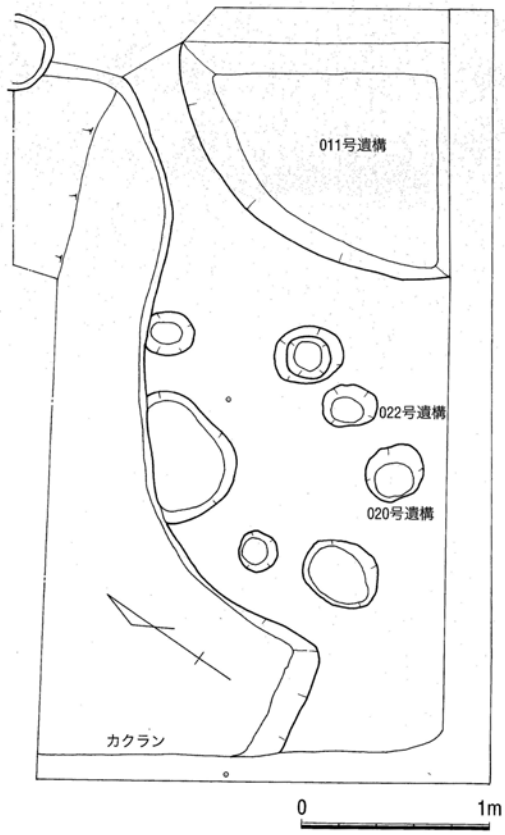


Fig.10　Ⅱ区第2面遺構実測図（S=1/40）

c. 第三面の調査（Fig.11）

標高3.0m前後で検出される暗黄褐色砂層面上で設定した遺構面である。Ⅰ区第1面に対応する遺構面である。検出された遺構は023号遺構とした溝遺構・SE-011に切られた状態で検出される025号遺構とした土坑などである。024号遺構とした遺構は、調査区南東側方向へ延びるため完掘できなかった遺構である。

023号遺構とした溝遺構は、幅60㎝前後、検出面から底面までの深さ20㎝前後を測る。溝の断面形は半円形を呈し、溝内には淡黒褐色砂が堆積する。溝の主軸はほぼ南北方向を採り、調査区北側方向へと延びる。南側では西側方向に緩く曲がりながら収束する。溝の収束する南端部壁は鉄分が沈着し淡赤褐色粗砂層となっていた。溝の埋土や底面からは須恵器碗や須恵器坏などの遺物が出土した。調査区付近の調査では同様に古代の時期の区画溝が検出されている。これらの溝は南北方向に掘削された区画溝であり、周辺に律令官人に伴う施設の存在が推定される地点でもある。本調査では、これら施設の存在を推測させるような遺物の出土はなかった。

025号遺構とした土坑は近世の井戸であるSE-011に、大半を切られ西側の部分が検出されるのみである。検出された部分より直径1m前後の円形土坑が復元できる。土坑内には暗灰褐色細砂が堆積していた。

第2面から第3面への掘り下げ時には、土師器二重口縁壺や高麗陶器、土師器坏、須恵器などの遺物が出土した。

第3面とした遺構面の年代は、検出された遺構・遺物より9世紀前半代の時期が考えられる。

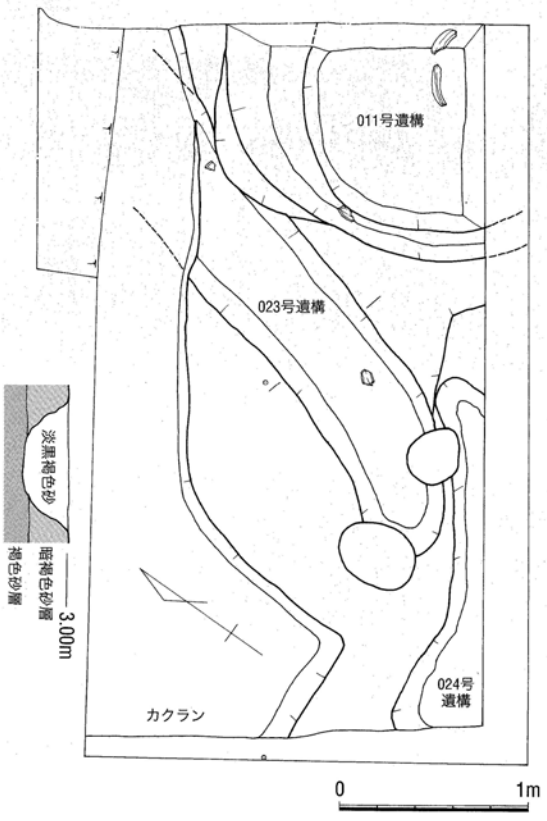
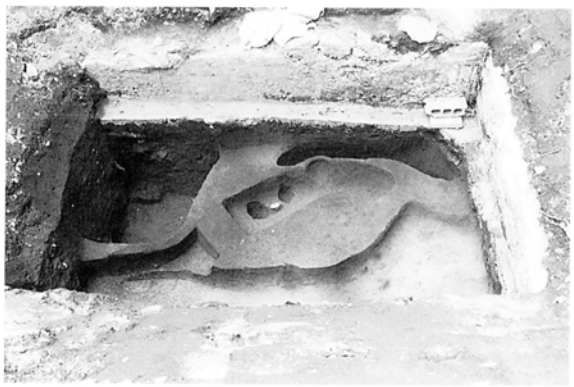


Fig.11　Ⅱ区第3面遺構実測図（S=1/40）

Ph.27　Ⅱ区第3面完掘状況（南西から）



Ph.28　Ⅱ区第3面完掘状況（北西から）

d. 第四面の調査（Fig.12）

標高2.8～2.9m前後で検出される暗褐色砂層面上で設定した遺構面である。Ⅰ区第2面に対応する遺構面である。検出された遺構には026号・027号遺構などの不定形土坑がある。027号遺構とした不定形土坑は南東側をSE-011に切られており、正確な平面形は把握できない。025号遺構下部に位置する土坑であり、検出時には025号遺構の掘り残しとも考えられたが、東側土層の観察より別個の遺構であることが判明した。検出面から土坑底面までは20cm前後の深さを測り、遺構内には褐色砂と暗褐色砂質土の混合層が堆積する。026号遺構も東側をSE-011に切られる土坑である。土坑内には淡黒褐色砂が堆積する。検出面から土坑底面までは深さ15cm前後を測る。

第4面とした遺構面では、調査区を南北方向に走る落ち込みのラインが確認される。遺構埋土の可能性が考えられたため、調査区中央部付近に検出されたラインに直交するようにトレンチを設定して堆積状況の確認を行った。その結果、西側壁面に植物生痕などが検出されたため谷地形が埋没したものであることが判明した。

第4面の遺構検出時には、暗褐色砂層に包含される弥生土器甕などの遺物が出土した。また、SE-011 の壁面においても谷の埋土中に包含される弥生土器の甕口縁部片などが検出された。

Ph.29　Ⅱ区第4面完掘状況（北東から）

Ph.30　Ⅱ区第4面完掘状況（北西から）

Ph.31　Ⅱ区第4面完掘状況（南西から）

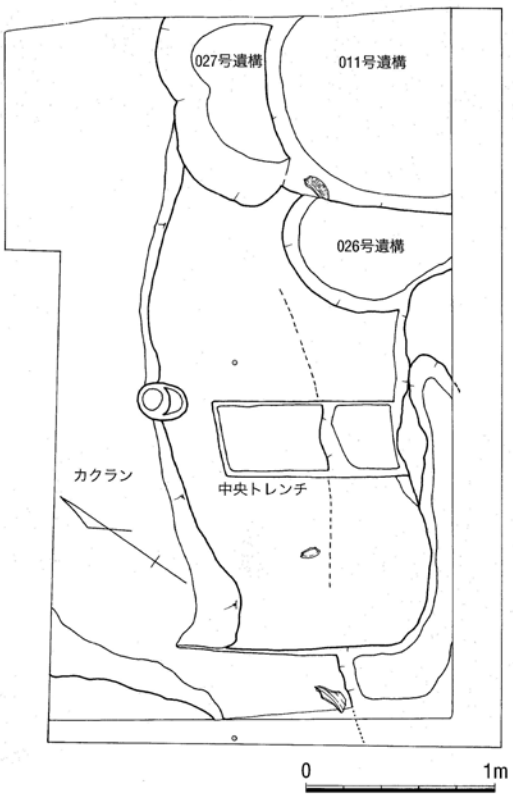


Fig.12　Ⅱ区第4面遺構実測図（S=1/40）

e. 第五面の調査（Fig.13）

標高2.7m前後で検出される黄褐色砂層面上で設定した遺構面である。Ⅰ区第3面に対応する遺構面である。検出された遺構はなく、第4面で検出した谷地形の調査を行った。

検出された谷地形は、北東方向から南東方向にかけて調査区を分断するように検出され、東側へ急激に落ちる。検出された谷地形はこれまでの周辺の調査により本調査地点に推定されていたもので、その推測を裏付けるものである。第4面・第5面とした遺構面の標高は2.7～2.9m前後を測るが、調査区内では2.0m前後の高さまで谷地形の傾斜は確認される。これより東側は調査区外へと延びるため調査は不可能であった。砂丘の東側の落ちにあたる谷は、調査区付近より東側に直線的に伸びることが推測されていたが、本調査で検出された部分より砂丘の東側縁辺が一端北側へ湾曲した後に再び東側方向へと続くものであることが考えられた。

砂丘の落ち際にはかって帯水環境であったことを示す痕跡が幾つか観察される。砂丘斜面上には植物生痕が落ちに沿うように検出され、鉄分沈着層が落ちの表面を覆っていることなどである。

谷の埋土にはFig.4下段で示したように、暗茶褐色砂・黄白色砂などが堆積しており、埋土中からは弥生時代後期から終末にかけての遺物が出土する。

Ph.32　Ⅱ区第5面完掘状況（北から）

Ph.33　Ⅱ区第5面完掘状況（北東から）

Ph.34　Ⅱ区北西壁土層堆積状況（北西から）

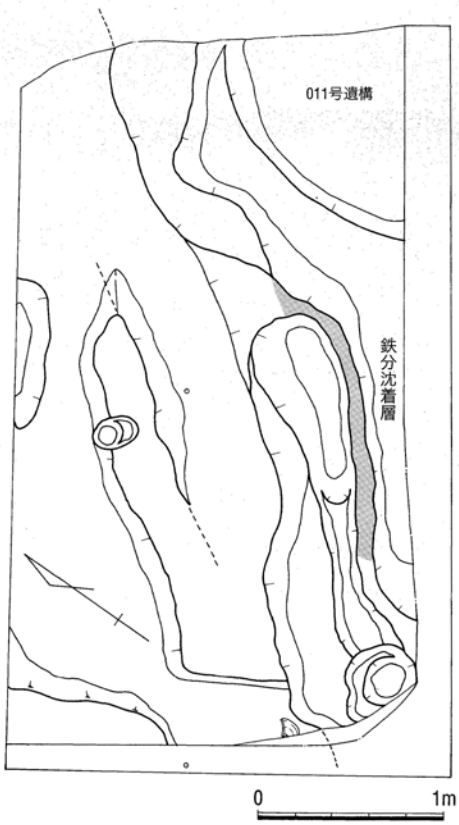


Fig.13　Ⅱ区第5面遺構実測図（S=1/40）

Ⅱ区第4面・第五面では埋没した谷地形の一部が検出された。この谷は弥生時代終末期前後に埋没したものと考えられ、第4面掘り下げ時や第五面の遺構検出には弥生時代後期から古墳時代初頭の時期に属する土器などが出土した。

Fig.14 にⅡ区第4面・第五面の遺構検出時に出土した遺物を示した。

1は須恵器蓋である。復元口径12.2cm、残存高0.9cmを測る。天井部にはヘラ削りが施される。

2は土師器埦である。高台径10.6cm、残存高3.0cmを測る。高台は断面方形を呈し、体部外底部の際より内側に貼り付けられる。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。

3は弥生土器壺頸部片である。頸部に突帯を貼り付け、ヘラ状工具突端部で刻み目を施す。焼成は良好で色調は褐色を呈する。4は弥生土器壺胴部片である。突帯部に櫛状工具突端部を用いて刻み目を施す。図では胴部上半部としたが、突帯の接合方向より胴部下半部である可能性も考えられる。器面の一部には煤が付着する。

5は土師器の器台坏部片である。復元口径16.4cm、残存高2.8cmを測る。口縁部には二条の沈線が施され、外器面には縦方向の刷毛目調整が施される。内器面には横方向の刷毛目調整が施される。

6は器台である。底径15.2cm、残存高9.0cmを測る。外器面には縦方向の刷毛目調整が施され、内器面には横方向の刷毛目調整が施される。焼成は良好で色調は褐色を呈する。

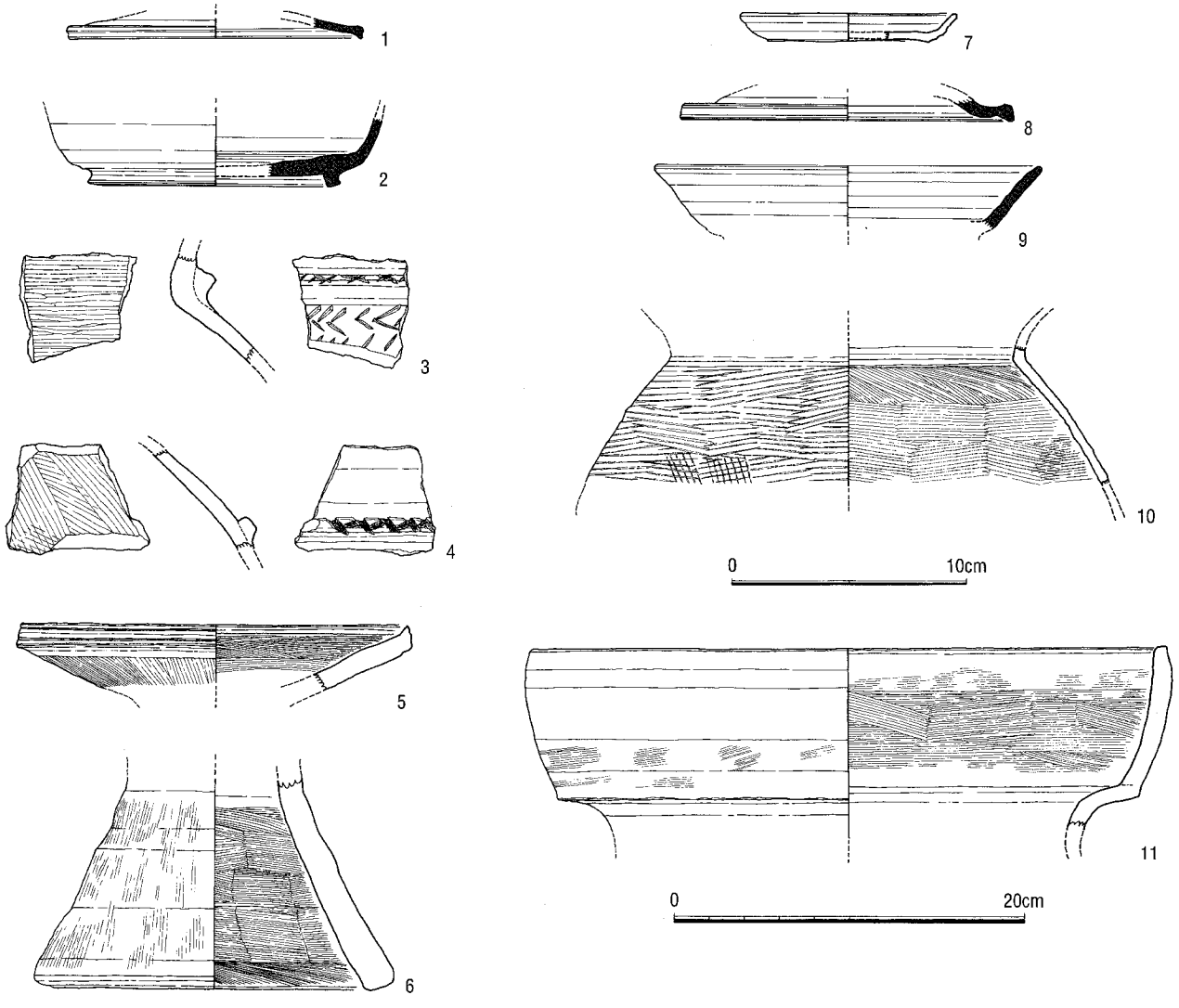


Fig.14　Ⅱ区出土遺物実測図(S=1/3・S=1/4)

7は土師器皿である。復元口径9.2㎝、器高1.2㎝を測る。底部はヘラ切り調整され、板目圧痕が加えられる。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

8は須恵器蓋である。復元口径14.2㎝、残存高1.1㎝を測る。9須恵器碗である。復元口径16.4㎝、残存高2.7㎝を測る。体部はナデ調整される。色調は濃灰色を呈する。

10は古式土師器壺の胴部片である。残存高6.2㎝を測る。外器面には平行叩き痕が残り、内器面は叩きの当て具痕を刷毛目調整で消している。体部には煤が付着する。

11二重口縁壺の口縁部である。復元口径36.0㎝、残存高10.4㎝を測る。外器面は摩滅により器面調整の大部分が失われているが、わずかに刷毛目調整が観察できる。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

（五）その他の出土遺物（Fig.15 ～ 17）

第136次調査は調査面積が狭いこともあり、遺構全体の調査ができたものは少なく、これに伴う遺物の出土量もわずかであった。出土遺物の大半は各調査面への掘り下げ時に出土したものである。出土した遺物は弥生時代終末期から古代・中世前半にかけてのものが多く、中世中頃以降の時期のものは出土量が極端に減少する。

これより遺構以外から出土した遺物についての説明を行う。

1は弥生土器の甕である。復元口径14.8㎝、底径4.0㎝、器高15.8㎝、胴部最大径16.0㎝を測る。外器面の口縁部付近から頸部にかけてはナデ調整が施され、体部には刷毛目調整が施される。内器面の底部付近には同心円文状の叩き当て具痕が残り、これを指ナデ調整によってナデ消している。体部には横方向の刷毛目調整が施される。2～4は古式土師器の壺口縁部片である。2は復元口径16.2㎝、

Ph.35　遺物出土状況（東から）

Ph.36　遺物出土状況（東から）

Ph.37　遺物出土状況（北東から）

Ph.38　遺物出土状況（北東から）

残存高2.7cmを測る。3は復元口径19.8cm、残存高3.4cmを測る。4は復元口径18.8cm、残存高4.7cmを測る。5は二重口縁壺の口縁部片である。復元口径26.4cm、残存高3.2cmを測る。口縁部内面には縦方向のヘラ磨きが施される。6は弥生土器の甕である。復元口径40.0cm、胴部最大径40.2cm、残存高20.2cmを測る。頸部には突帯をナデ調整によって貼り付ける。外器面には縦方向の刷毛目調整、内器面には横・斜め方向の刷毛目調整を施す。焼成は良好で色調は褐色を呈する。1・6は終末期に位置づけられる土器である。

7～9・16～18は土師器皿である。7は口径7.8cm、底径5.5cm、器高1.3cmを測る。8は口径8.0cm、底径6.0cm、器高1.5cmを測る。9は口径8.0cm、底径6.6cm、器高1.3cmを測る。7～9の底部は糸切り調整され、9には板目圧痕が加えられる。16は口径9.0cm、底径7.3cm、器高1.1cmを測る。17は復元口径8.4cm、器高1.1cmを測る。18は復元口径8.6cm、器高1.2cmを測る。16～18の底部はヘラ切り調整される。

10～15・19～23は土師器坏である。10は口径11.6cm、底径7.6cm、器高2.8cmを測る。11は口径11.8cm、底径7.5cm、器高2.75cmを測る。12は口径11.6cm、底径7.0cm、器高2.6cmを測る。13は口径12.4cm、底径7.6cm、器高3.0cmを測る。14は口径12.0cm、底径8.0cm、器高2.5cmを測る。15は復元口径11.0cm、底径7.8cm、器高2.4cmを測る。19は復元口径10.8cm、底径7.2cm、器高3.0cmを測る。20は口径11.6cm、底径8.2cm、器高3.6cmを測る。21は口径10.6cm、底径7.1cm、器高3.0cm を測る。22は口径12.8cm、底径8.5cm、器高2.7cmを測る。底部は全て糸切り調整される。13・15・22の底部には板目圧痕が加えられる。

24は同安窯系青磁皿である。復元口径10.6cm、残存高1.7cmを測る。釉調は淡オリーブ色を呈する。

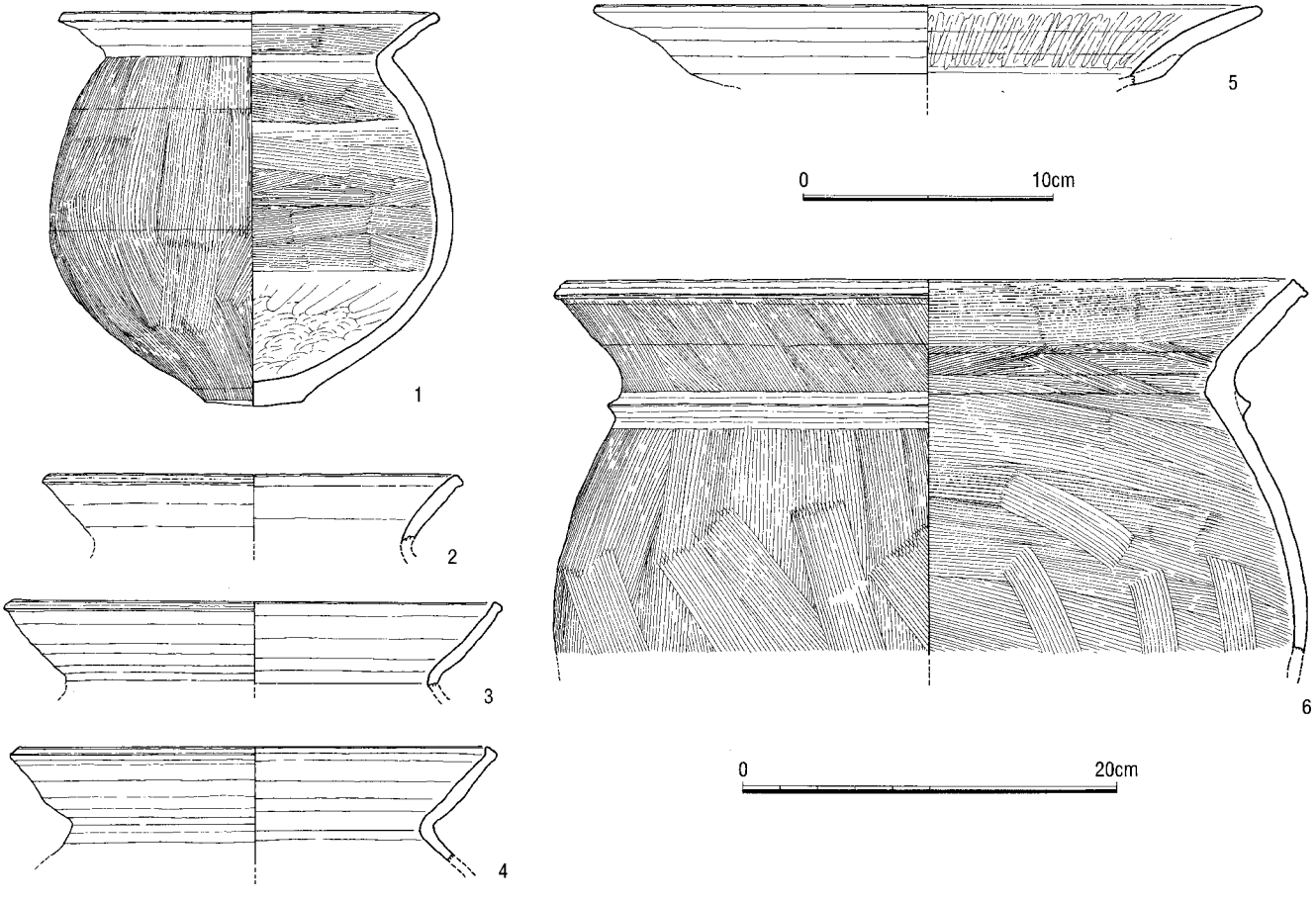


Fig.15　その他の出土遺物(S=1/3・S=1/4)

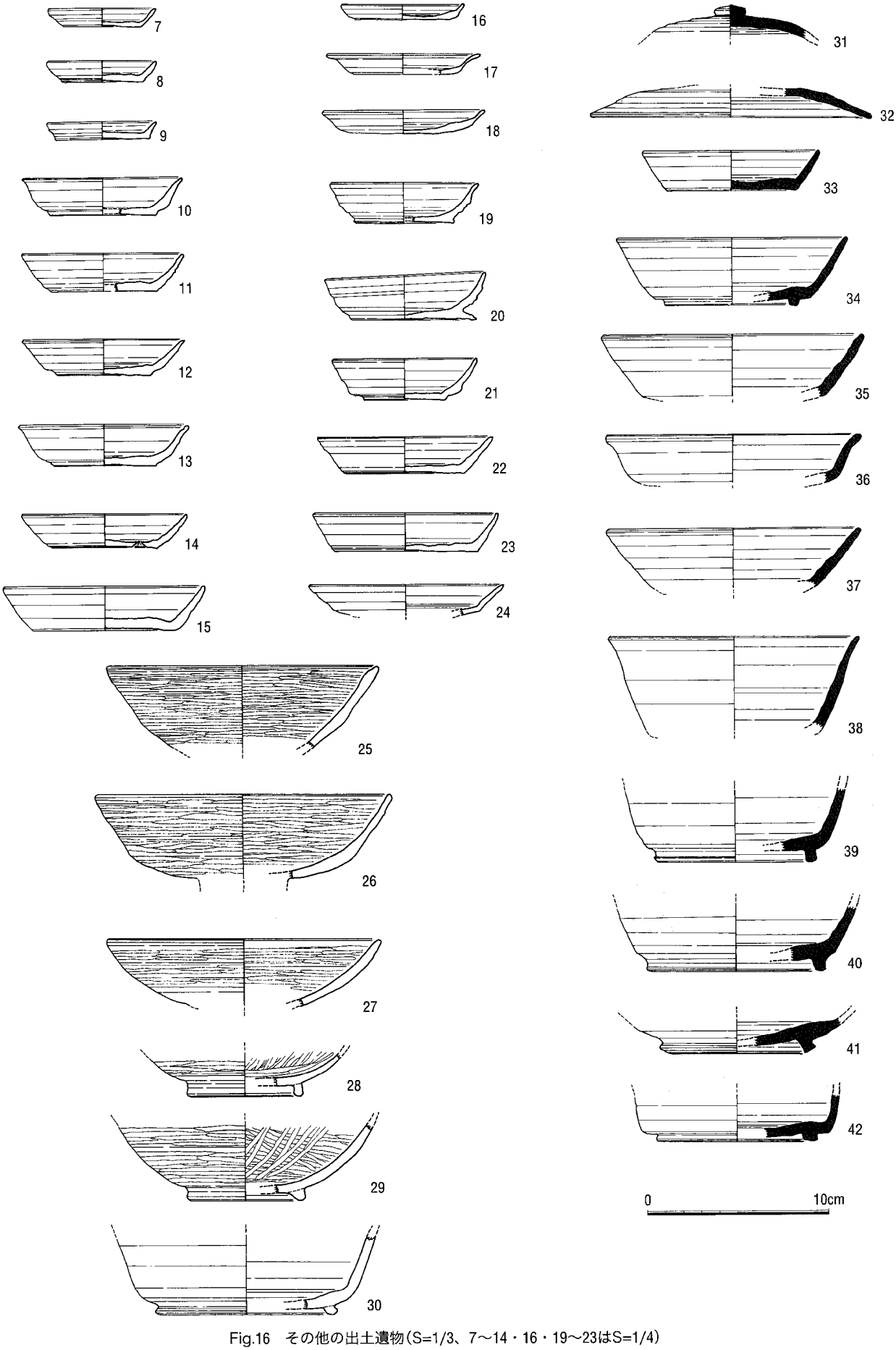


Fig.16　その他の出土遺物(S=1/3、7～14・16・19～23はS=1/4)

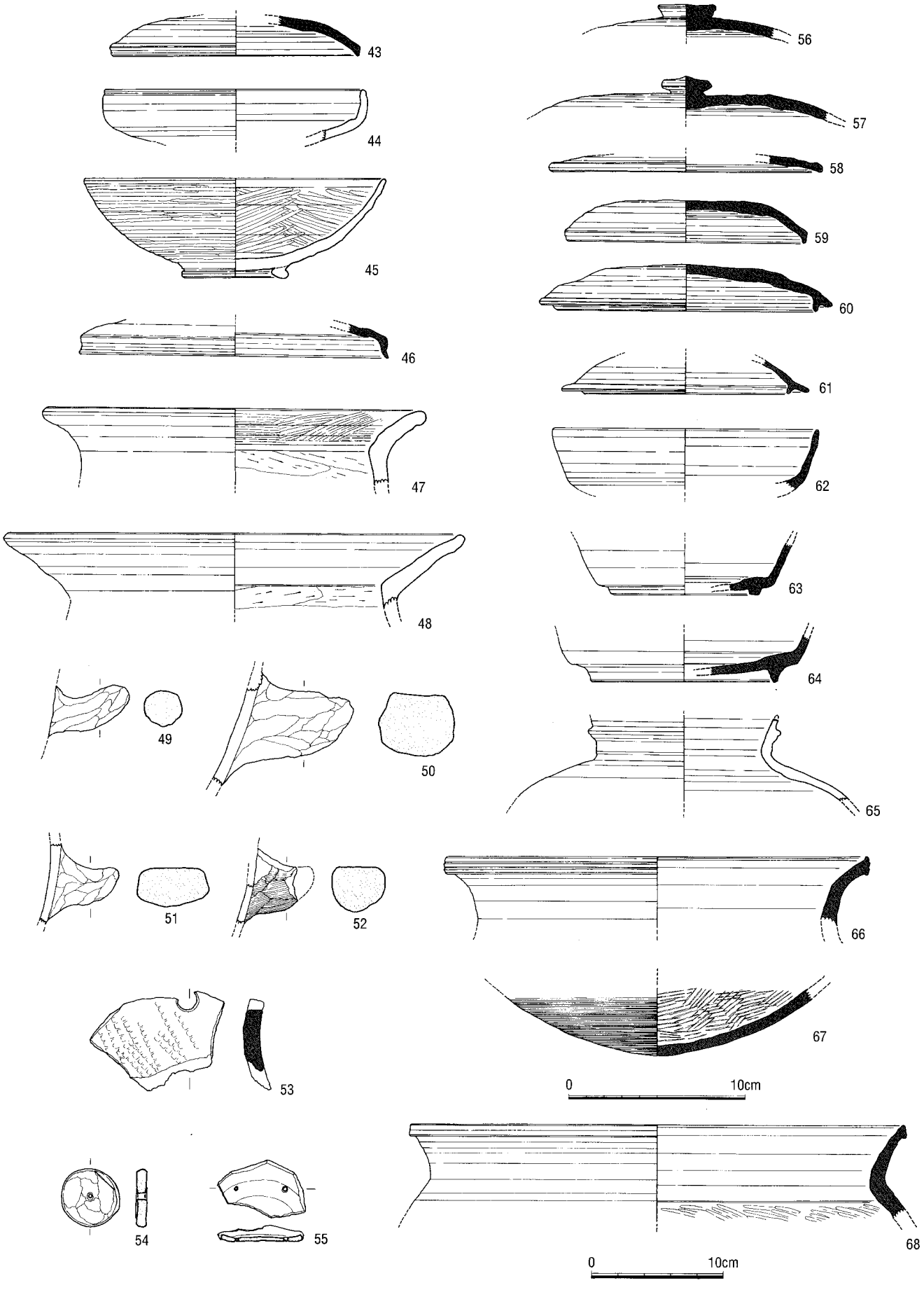


Fig.17　その他の出土遺物(S=1/3・S=1/4)

25・28は瓦器椀である。25は復元口径14.8cm、残存高4.5cmを測る。内外器面に丁寧な横方向のヘラ磨きが施される。28は高台径6.4cm、残存高2.4cmを測る。外器面には横方向のヘラ磨きが施され、内器面には格子状のヘラ磨きが施される。いずれも焼成は良好で色調は黒灰色を呈する。

26・27・29・30は土師器埦である。26は復元口径16.2cm、残存高4.6cmを測る。27は復元口径14.8cm、残存高3.7cmを測る。29は高台径6.4cm、残存高4.3cmを測る。内器面には格子状のヘラ磨きが施される。30は高台径9.6cm、残存高4.4cmを測る。高台は断面が潰れた台形を呈し、外底部際に貼り付けられる。いずれも焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

31・32は須恵器蓋である。31は宝珠形の摘み部を持つ。32は復元口径15.4cm、残存高1.6cmを測る。天井部にはヘラ削りが施され、体部はナデ調整で成形される。

33・36は須恵器坏である。33は復元口径9.6cm、底径7.0cm、器高2.2cmを測る。底部はヘラ切りされる。36は復元口径13.8cm、残存高2.7cmを測る。体部はナデ調整され、口縁部は端部で外反する。

34・35・37・38は須恵器碗である。34は復元口径12.6cm、高台径7.3cm、器高3.7cmを測る。高台は断面形が方形を呈し、外底部より内側寄りに貼り付けられる。35は復元口径14.4cm、残存高3.4cmを測る。37は復元口径14.0cm、残存高3.3cmを測る。38は復元口径13.8cm、残存高5.2cmを測る。身が深く、口縁部はわずかに外反する。

39～42は須恵器碗高台部片である。39は高台径8.8cm、残存高4.0cmを測る。外底部より内側に断面方形の高台が貼り付けられる。40は高台径9.6cm、残存高3.5cmを測る。高台は外底部際に貼り付けられる。41は高台径8.6cm、残存高1.9cmを測る。高台は断面長方形を呈する。42は高台径8.8cm、残存高2.6cmを測る。高台は断面方形を呈する。

43・46は須恵器蓋である。43は復元口径13.8cm、残存高2.3cmを測る。46は復元口径17.4cm、残存高1.9cmを測る。体部には屈曲部を持ち、口縁部は端部で外反する。

44は土師器坏である。復元口径14.6cm、残存高2.9cmを測る。口縁部端部に段を有する。

45は瓦器椀である。口径16.8cm、高台径6.0cm、器高5.6cmを測る。外器面には横方向のヘラ磨きが施され、内器面には格子状のヘラ磨きが施される。焼成は良好で色調は黒灰色を呈する。

47・48は土師器甕の口縁部片である。47は復元口径21.6cm、残存高4.3cmを測る。48は復元口径25.2cm、残存高4.2cmを測る。共に外器面は摩滅により器面調整が失われているが、内器面にはヘラ削りが観察される。47の口縁部内面には刷毛目調整が施される。

49～52は土師器甑の把手片である。いずれも甑胴部中程にナデ付けられる把手片である。49～51はナデ調整で成形されるが、52は成形後に刷毛目調整が施される。

53は須恵器甕の胴部片を転用した土器錘である。破損した胴部片に穿孔して錘として使用する。

54は土製紡錘車である。直径3.2cm、器厚0.6cmを測る。55は土師器Ⅲを転用した土器錘である。土師器坏の破片に二カ所の穿孔を行い、紐通孔とする。

56～61は須恵器蓋である。56・57は宝珠形の摘み部を持つ。58は復元口径15.4cm、残存高0.9cmを測る。59は口径13.4cm、器高3.4cmを測る。60は復元口径16.6cm、器高2.6cmを測る。天井部はヘラ削りが施される。61は復元口径14.0cm、残存高1.9cmを測る。いずれも焼成は良好であり、色調は濃灰色～灰褐色を呈する。

62は須恵器碗である。復元口径14.8cm、残存高3.5cmを測る。体部はナデ調整で成形される。焼成は良好で色調は濃灰色を呈する。63・64は須恵器碗高台部である。63は高台径8.4cm、残存高3.0cmを測る。高台部の断面形は方形を呈する。64は高台径10.4cm、残存高2.7cmを測る。高台部の断面形は三角形を呈する。焼成は良好であり、色調は灰色を呈する。

65は高麗陶器の壺頸部片である。頸部には突帯を巡らせる。色調は灰紫色を呈する。

66・68は須恵器壺口縁部片である。66は復元口径23.6㎝、残存高3.9㎝を測る。68は復元口径39.2㎝、残存高7.1㎝を測る。67は須恵器壺底部片である。外器面にはカキメが観察され、内底部には叩き痕が残る。焼成は良好で色調は濃灰色を呈する。

3. まとめ

以上簡単ではあるが、各調査区と遺構面、出土遺物についての説明を行ってきた。最後に第136次調査の簡単なまとめと今後の調査における問題点の指摘を行いたい。

本調査は対象面積が狭く、排土処理や安全対策などの制約により実際に調査が行えたのは15.5㎡前後の面積であり、各遺構面において十分な調査を行えたわけではない。検出された遺構も面的な広がりを確認できたものはなく、断片的な資料となってしまっている。

調査区外に展開する遺構として検出されたものでは、古代に属する区画溝と弥生時代の遺構が展開する砂丘縁辺とそれに伴う谷地形の落ちがあり、当時の地形復元において貴重な資料を得ることができた。

第136次調査地点の南東側に隣接する第21次調査地点では、現在の地割りに比較的近い方向で重複して掘削される溝遺構が検出されていた。これらの溝遺構は本調査地点方向に延びており、当初はこれが調査区内西側付近で検出されると推測されていたが、調査区西側部分は隣接建物への影響から調査を断念したため、検出されなかった。

出土遺物は弥生時代後期の遺物から中世前半期の遺物がコンテナケース5箱分出土した。出土遺物に関して注目される点は、古代に属する須恵器・土師器の出土量が多いことである。律令官人に伴う施設の存在を示す遺物の出土はなかったが、調査では古代の時期の区画溝が検出されており、調査地点付近に南北方向の溝によって画された古代の遺構が存在していたことを示す資料であり、今後の調査に期待される。

博多遺跡群内の調査では珍しく銅銭の出土が一点もなかった。調査地点が位置する博多遺跡群の南側部分の一部は、中世中頃から近世まで耕作地化されていたことがこれまでの調査成果から明らかにされている。本調査においても、中世中頃以降の遺構はSE-011とした近世の井戸遺構以外ほとんど検出されておらず、該期には耕作地として使用されていたことが推定される。都市の中心は遺跡群の北東側に移動しており、調査区付近は閑散とした景観が復元される。

今回の報告では断片的な遺構の説明にとどまり、周辺の調査区で検出される遺構との検討が不十分になってしまった。今後の課題としたい。

博　多　94

福岡市埋蔵文化財調査報告書第765集

2003年3月31日発行

発行　福岡市教育委員会

印刷　㈱九州カスタム印刷

博多
94

福岡市埋蔵文化財調査報告書第765集

2003

福岡市教育委員会